

主催者挨拶

福岡県新社会推進部

部長 富安 節子

足元の悪い中、多数お集まり頂きありがとうございます。

このフォーラムは文化施設や文化活動をしている皆さんが一堂に会し、日頃の活動報告や、ネットワーク作りをしていただくことを目的に、今回初めて開きます。このフォーラムが文化を推進し支えている皆様の活動の中心に繋がり、事業として今後大きく育っていくことを期待しております。

現在は少子高齢化が進み、世界の社会情勢等大きく変化し先行き不透明です。このような時代だからこそ、精神的ゆとりを持つことが益々重要となってくるのでございます。心の拠り所である芸術や文化に対する関心が高まり、地域で素晴らしい文化が生まれ親しむことが出来れば地域の皆さんの生きる力になりますし誇りにもなります。そのためには、文化ボランティアの方々の支えがないといけません。皆さんの存在が不可欠です。

今日の会場である、九州国立博物館にもボランティアが300名ほどいて、様々な分野で活躍をしています。

今日ここに来る途中、昨日天皇陛下の即位20周年記念式典でのエグザイルの話になって、すごい時代になったものだ、「私たちの時代はあのようなアーティストが天皇陛下の前で踊るような事は有り得なかったよねー」と話してきました。

平成16年、国民文化祭の時は皇太子殿下をお迎えし、氷川きよしさんを迎えてオープニングセレモニーや大会イベントを行いました。その時の主催団体の一つが「NPO法人文化ボランティアとびうめの会」の前身である「とびうめ国文祭ボランティアデスク」です。

博多駅の近くにある県の総合庁舎で、ボランティアが一生懸命やって大きなイベントが成功しました。

福岡は文化も皆で楽しむけれど、いざと言う時はすごい力が出せると、来る途中の車の中で、しみじみ回想してきました。

文化の振興は文化ボランティアの皆さんの支え無しでは出来ません。今日は九州国立博物館館長や古賀さんから講演をいただきます。フォーラムを開催するにあたってご尽力いただいた皆さまに深く感謝申し上げます。ボランティアの皆さんのご支援、ご指導なしでは成り立ちません。今後ともよろしくお願いします。感謝申し上げて本日の挨拶に代えさせていただきます。本日はありがとうございました。

基調講演

「市民のちから・市民運動とボランティア」

九州国立博物館

館長 三輪 嘉六

皆様はボランティアとして、さまざまな面で活動されていることと思います。いま、ボランティアの内容が大変多様化していることがボランティア活動の特徴であり、日本が誇れることの一つだといってもいいでしょう。

特にその中の大きな部分は地域への貢献という流れの中、市民運動との関係の中で生まれてきたのではないかというのが私なりの解釈と展開の仕方です。歴史的環境の保存運動を通して、市民のちから、ある面でこれもボランティア活動といえますが、これがどのように展開してきたかということをお話します。

歴史的環境という言いかたは皆さんなじみ深いものと思います。ところが良く考えると歴史的環境はいまでは当たり前ですが、この言葉が定着したのは15~16年前のことで、一般市民の中に馴染みやすく入ってきました。例えば大宰府の歴史的環境や、さまざまな地域の歴史的環境を考えると背景には文化財があります。其の文化財を見てきたときにいくつかの危機的状況もありました。

当博物館は文化財の活用に力を注いでいますが多くの場合、文化ボランティアは文化財の活用と無関係に進んでいるわけではないと思います。前向きな活用に至るまでの今日の経緯の中までに、文化財は保存上大きな危機が4回あったと思います。

第1回目の危機は明治の初期、神仏分離令にともなう廃仏毀釈で、特に寺院に於いて文化財が悲惨な思いをしました。ご存知の与謝野晶子がかつて「美男におわす」と詠んだ鎌倉の大仏ですが、これらをブロンズの値段でアメリカに売ってしまおうということもありました。

また皆様馴染みの奈良の興福寺の五重の塔、高さが50メートルの堂々たる文化財ですが当時は無用の長物として燃してしまおうということで、市民は売却し火をつける直前になって周辺の町に火が広がるのを畏れて中止となりました。

或は、今は世界遺産として有名になった姫路城も当時100円で売却しようとしたが解体に300円ぐらいかかるという事で放っておこうということになりました。

このように廃仏毀釈令による仏教文化をはじめ、伝統的な文化への大きな影響がありました。日本の文化財の多くは、仏教文化の中で多く構築されてきた事は言うまでもありません。それだけに大きな危機として今でも象徴的に言われています。

第2回目の大きな危機は、簡単に言うと日本の大事な美術品が海外に流出するようになってきたことです。有名なのはボストン美術館に絵巻物など日本の美術品が沢山流出し、

あるいは絵巻物だけでなくさまざまな分野の文化財が海外に流出したわけで、其の背景にあるのは当時の日本は文明開化の時代で、旧物破壊、つまり古いものは必要ない新しいもの西洋的なものを大事にして古いものには価値を認めない風潮でした。いまそれらがフランスのギメ博物館やらアメリカのボストン美術館ワシントンDCのフリア美術館などにもたらされたわけです。具体的にはフリア美術館のものはフリアが横浜から絹の輸出と一緒に出ていくわけですが、別に彼等が悪い事をしたのではなく多くは日本の近代化に貢献したお雇い外国人としての存在であったわけです。お札の印刷をわが国に教えてくれたイタリアのキヨッソーネです。イタリアジェノバのキヨッソーネ美術館には彼が収集した素晴らしい美術品があります。そういうものは一方では、外国に日本の文化を知らしめることにもなりました。

第3回目の危機は第2次世界大戦の混乱期、すなわち戦中戦後ですが空襲などによって文化財が破壊されました。例えば奈良は田舎だから大丈夫だろうという発想で有名な文化財を奈良県や長野県に疎開させたのです。

本当に空襲が始まって危なくなると各地の文化財が全国各地に疎開しました。漆の生産で有名な岩手の浄法寺、あるいは長野の松代などに移転しました。

其の当時、国宝になっている建物は1,700棟位ある中で2~3年間の内250棟位が焼けました。ものすごい数字です。有名なのは尾張の名古屋城であり東京浅草の浅草寺の本堂や五重塔、沖縄の守礼の門もその一つです。

戦中戦後の混乱は文化財にとっての大きな危機であり、戦前を中心すれば大きな危機が3回あったことになります。それらを乗り越えながら文化財の保存は今日に至っています。

最後の4回目の危機は、高度経済成長期だと思います。これは皆さんの今の生活、ボランティアとある意味では直接関係があると思います。高度経済成長をどう位置づけるかは難しいが、昭和39年新幹線が開通し東京オリンピックが開かれました。これを契機としてその前後から時の総理大臣田中角栄は日本列島改造論を打ち出し一世を風靡、我々も熱中した時代があります。私は丁度この頃に文化財の世界に身をおくことになります。その高度経済成長のよし悪しは別として非常に象徴的なものでした。

1960~70年代にかけて高度経済成長にともなう巨大な開発が行われることにより、その恩恵をこうむった経済や産業があったことも確かです。一方、巨大な都市化また広大な土地開発は人々の生活を激変させました。しかし初期のこの段階では、歴史的環境や自然の破壊はそれほど問題にはなりません。はじめ高度成長は環境問題として認識されていませんでしたが、市民運動やボランティア活動の中で、後に環境問題として位置づけられ今日に至った経緯があり、環境問題の一例として九州では水俣病であり、歴史や文化で言うと、九州国立博物館の近くですが大宰府政庁、観世音寺、学校院、大野城、水城などを含むいわゆる大宰府遺跡の保存問題です。この保存問題は特に高度経済成長の大きな影響下でのことであったわけです。博多の都市化それともなうドーナツ化現象、大宰府が

新しい住宅地化への流れとなっていきます。

いずれにしても開発と文化財の保存という課題は九州では歴史的環境の保存と人の生活をいかにバランスよくやっていくかという象徴的保存問題として捉えられていきました。

いまこの博物館がつくられた大きな要因の一つとして、岡倉天心が非常に貢献したと聞かされており私も否定するものではありませんが、もう一つ大きな要因は保存問題です。開発する人、保存を考える人、住民、この三者が議論を重ねながら今日の形を造ってきたそのエネルギーは膨大なものであり、その結果の一つとして博物館が出来た一番大きな要因はこれだと思います。当時私の仲間が住民の方々と車座になって、開発か？保存か？と話し続けた中で、そして文化財は保存だけでなく活用が必要だ、だから頑張ろうといながら亡くなった方もいました。その結果としてこの博物館が出来上がりました。そんな風に思っています。その意志をしっかり受け継いでいかねばならないと思っています。いずれにしても市民と共にあるこの博物館はこのような流れをもっています。このようなことがまさにシンボルとして当時の歴史的環境があったわけです。

奈良はわたしの文化財生活のスタートでした。奈良では平城宮跡、東京では国分寺、東北の多賀城など、開発か？保存か？高度経済成長の流れの中このような動きがあり、また各地の史跡・遺跡の場所で発生しました。

当時、開発のリスクとして四日市喘息、瀬戸内海の汚染、九州では水俣病がその典型、あるいは川崎市の喘息など大きな問題となりました。このような公害問題、これは開発のリスクの一つとしてみんなが自然と意識し始めこれに対して市民がどのように立ち上がってきたか、このことはボランティア活動にも大きくつながっているものと私は主張したいと思います。細かな一つ一つにもものすごいドラマがあり涙や汗等様々あります。1960年~70年の市民運動の展開結果、政治的にも行政的にも結果的にしっかり認識して貰える様になりました。

それらの公害問題をもとにして大気汚染防止法が1968年、つづいて1970年には水質汚染防止法、さらに1972年には自然環境保全法が成立しております。このことは市民が市民運動として、またボランティアとして参加、活動した結果であると思います。

このように公害問題とともにこの時期もう一つ大きなテーマとして、自然環境の破壊がありました。象徴的なものとして尾瀬の自動車道建設の問題です。あの歌に詠われている美しい尾瀬へ自動車道を通して便利にしようという事です。当時尾瀬は自然豊かな憧れの地の一つであり地域住民、全国の自然を愛する人達が、“自然を守れ”と立ち上がりました。公害に対する運動のパワーを次は自然破壊防止へと大きく変えていく時代でもありました。この運動は成功しました。当時私は文化庁の記念物課に在籍し本職は考古学ですが、人手不足でなんでもやらされ尾瀬保存についても手伝いました。

保存運動の人達と車座になって、野外に布団を敷いて寝、自然を語り合い、そのとき食べた熊の肉が美味しかった事、いまでも覚えています。そのとき自然について色々議論しこの問題もしっかり受け止めました。結局1971年尾瀬自動車道開発は中止となりました。

この時期、いまの環境庁ができました。それまで尾瀬の問題は文化庁の管轄で、文化庁は天然記念物自然保護も仕事の範囲内でしたが環境庁ができたことにより、尾瀬の件は環境庁に移りました。初代長官大石 武さんの一生懸命な尽力は忘れられません。

当時は開発中心でしたが公害、自然保護を契機として良かった事は市民が立ち上がったこと、今に言うボランティアです。

このような流れの中で、歴史的環境の保存の問題も起きてくるわけです。公害から自然破壊へという流れが歴史的環境の保存問題に大きく展開してくるのが1980年代です。ものによっては1990年代にもおこりますが、具体的な形で歴史的環境の保存が始まりました。各地の文化ボランティアの皆さんはこの問題に大なり小なり関与してきます。

福岡の歴史ある地を、寺町をなんとかしたい或は博多山笠を中心とした町づくりをなど、さまざまな取り組みがあります。この背景にある歴史的環境は、自分達の祖父母以前から作られていた一つの環境です。その環境はそこに住んでいる人達の精神的連帯のシンボルといった捉え方です。これが皆さんの支えになると私は思います。その理念は、公害が人々の生命を犯す侵略行為侵害行為です。それに対して多くのボランティアが取り組んでいる歴史的環境を守ろうとする人の主張は、歴史的環境を破壊するという事は生命や健康への侵略行為侵害行為、住民の精神生活への侵害だと位置づけております。その地を愛しみんが寄り添って自分達の生活を展開していく、文化を感じ自分達の先祖を感じこれからの地域の展開を考える、たったこれだけのことですがこれに命を懸けるこんなことを皆さんが考えてきたわけです。

このことで私は「桜守」の話を思い出します。村に伝わる一本の樹、形のないものかもしれないが海辺から伝わる潮風、その余韻だけで何か生きていけるような感じを受ける環境がある、たったこれだけかもしれないが人々の精神を穏やかにする、遠くから聞こえる寺の鐘の音などでも穏やかになる、そういうことをアメニティと言うが日本語では「住み心地のよさ」「居心地の良い」の意味です。これを大事にしていきたい。

こんなことがあって、快適な空間私たちの生活が維持し易いこの空間の大事さをしっかりと歴史的環境と位置づけ、これをどのように支えていくかそれに市民運動、市民のちからが対応していく、市民のちからとはそういうことと私は理解しています。

例えばその典型的な一つに先程の自然破壊防止法、水質汚濁防止法、自然保護法、これらは1960年後半から70年代初期です。最後に1975年に伝統的建造物の保護地区の選定という文化財保護法の改正が行われました。これはまさに公害、自然保護との連動の中で推進した歴史的環境保存のシンボルでもありました。

1975年、これから住民による住民の生活環境を守るという大きなボランティア的な力が各地で一斉に拡がりました。

その典型が長野県南木曾の「妻籠の宿」、シンボリックに言えばここが第一号のようなものです。ただ単に町並みを何とか保存しようということだけではなく、保存する事がその地の再開発という保存的再開発をやりたいという事です。保存と言うと一般論ではその形を

一切変えないと思いがちですがそれを大事にしながら、保存的再開発という新しい開発の理念をつくっていった。当時このような理念はありませんでした。この理念を最初にしっかりと捉えたのが妻籠のボランティアの人達で、江戸時代のような妻籠の町並みの雰囲気を保ちながら生活体験ができるような場、いわゆる開発的に保存できる方法はないか前向きの新しい理念を持つボランティアが活動の中心となりその保存的開発をやっていきました。

当時このような理念を最も先行的に考えていたのが、イギリスとフランスでした。フランスではアンドレ・マルローにより 1962 年歴史的街区保存法ができ、またイギリスでは 1967 年シビック・アメニティ運動があります。日本ではこういう考えは遅れていたわけです。言うまでもなくこれらに連動して「妻籠の宿」以降福岡では吉井町など全国 100 位の町並み保存が行われてくるわけです。何処でもそうでしたがこれらの活動の背景には市民の力が大きかった事を受け止めなければならないと思います。「妻籠の宿」の保存的開発のケースはボランティアの成果であり市民の力が実った姿だと思います。今世界遺産になっている白川村もそうですが、地域の活性化でいえばここは五月の連休だけで五十万の観光客が訪れるそうです。

新しい保存的開発を模索してきたその殆どが無償で働くボランティアです。一番言いたい事は、住民運動は市民のちからですが、何々を保存しようとか、大宰府を守れとか、この地域の歴史的環境を守ろうとかそのような住民運動は息長く対応していかなければならないが、それに県や市町村が条例をつくり、水俣や川崎、四日市も同じ展開を経ながら最後は国の法律制定となってきた。その推進のために市民がボランティア活動として参加し広がっていくという循環形になっている、これがまさに市民のちからの示し方だと思っています。

この博物館もそうで博物館が出来た流れは、福岡県、文化庁の対応があったことは事実だがその背景には市民の募金活動や誘致活動がありその結果として九州国立博物館ができた。今それをどういう形で、市民のちからを市民に還元するか、これが博物館活動の一つだと思っています。

市民と共生する展開の中で運営があり展開がある、それはある種の循環の形です。住民運動でできた、そして住民に還していくそれが博物館のあり方だと思います。どういう形で還元するかが大事でまさに住民運動から始まり、制度化しそのまま放置するのではなくそれをしっかり市民が維持しながら展開していく、このような構造がボランティアの一つのあり方だと思います。市民のちからとボランティアは、市民が参加することで意識の高揚にもなります。

ボランティアが大きな形で見直されるのは阪神淡路大震災からです。それまでも医療や介護のボランティアは当たり前のようにありました。しかし私たちが求める文化的ボランティアは阪神淡路大震災が大きな契機だったと思います。

当時私は文化財レスキューというボランティアのコーディネーターとして参加していま

したが、これからボランティアの形が大きく変わるな—という印象をもちました。学校教育の場でもボランティアが大きなテーマとして出てきました。そのような中でボランティアのあり方、意識改革、これを契機にどんどん生まれてきました。これからのボランティアのあり方は色々考えられます。誤解を招くかもしれないが私の独り言と思って聞いてください。

これからはこういうあり方が求められるのではないのでしょうか。すでに活動している人は大勢ですが従来私達は好むと好まざるとに関らず管理社会、管理形態の中で生活してきました。しかしボランティアとして必要なのは縦の管理ではなく横の絆を大事にしていくことがボランティアが進展していく中での非常に大きな課題ではないのでしょうか。横の絆を大事にするボランティアのあり方が、ボランティアの持つ目的の達成が視覚的にも受け止める事のできる形になると思います。

これは早くから言われていることですが自主的な活動をする事が大事で、「何かしましょうか」「何が出来ない」ではなく、「これが出来ます」という積極的な思考でボランティアの底力を発揮してもらう場面を作っていくことも大事だと考えています。

もう一つは「学びの場は出会いの場、そして8万時間を大事にしたい」これを強調したい。これはどういうことか？これを説明しましょう。一般論として、20歳で就職して60歳まで一日8時間働いたとして概ね8万時間です。60歳で定年、定年後のあり方として、最近寿命が延びていますが、平均寿命を80歳と考えその20年間身体を動かす時間は概ね8万時間です。人生の働き盛りに8万時間働き次の20年の人生の中で8万時間働くというか、充分余暇に使える時間です。即ち過去の8万時間これからの8万時間それを対比して、是非新しい学びの場、新しい出会いの場を作っていくことが、心豊かなボランティア活動の大きな励みになると思います。

九州国立博物館には300人あまりのボランティアに参加してもらい大変感謝しています。ボランティアからの色々な提案をして欲しいと思っています。ボランティアの提案を待ち望んでいる自治体、組織は非常に多いはずですが。前向きでも後ろ向きでもどんな意見でもいいので、上から押し付けられるテーマではなく、ボランティアの人達からでてくる提案が欲しいと思います。それによって今回みたいな新しいボランティアサミットのように、組織としての動きが出てくる事になります。ボランティアは各地に多くありますが、集いとか対応はまだまだ不十分でそういうなかで、日本らしいボランティアの集い、国際交流への発展の可能性を私は期待したいと思います。

日本のボランティアのあり方と外国のそれとは、私たちの体験からしてもずいぶん違うと思います。それぞれ特長がありどちらが良い悪いではなく小さなボランティアでも大きなボランティアでもよいが、ボランティアの人が外国のボランティアとの出会いのチャンスをもつことで、さらに新しいボランティア文化ができていくのではないかと理解しています。

もう一つ、ボランティアには行動規定、倫理規定が欲しいと思います。自由自在に活動

してもらふことは大事だがそこには自から規制されるべき行動規定や倫理規定をボランティアの人達同志構築していく事がボランティアに対する社会的信頼を増す事であらうと思ひます。

九州国立博物館を中心とした活動の一部ですが、ボランティアは単にボランティアだけでなく、そこから発展しNPO法人へ展開している例もあります。ここ九州国立博物館ではI PM(総合的有害生物管理)とありますが、環境で文化財を守ろうというつまり人の手によって文化財を守ることであるわけですが、このボランティア活動でNPO法人として九州にこの活動を広げつつあり、新しい展開を期待しています。

もしかして少し余談になるかも知れませんが、先ほどの提案の話に関連してボランティアからの提案を、ある意味で感動的に受け止めたことがありました。

この夏この博物館で阿修羅展をしました。71万人の入場がありました。長蛇の列で批判も受けたし問題も少なくなかったのですが、その中で嬉しいことがいくつかありました。その一つがあの大混雑の阿修羅展の中で、一日だけ障害者だけに開放しては、という提案がボランティアからあったことです。さっそくボランティアの皆さん、スタッフの協力のもと成功裡に終える事が出来ました。このようなことは我々の理念の中では気が付かなかったことで、ボランティアの提案の中で達成できたことを改めてこの場で感謝しております。

最後に私はいろいろな意味で博物館に縁(ゆかり)を頂いた方々、つまりボランティアの人達が博物館にとって大きな財産だと思っています。

ご清聴を有難うございました。

基調講演

「文化ボランティアってなんだろう？」

アートサポートふくおか

代表 古賀 弥生

まず始めに「アートサポートふくおか」の活動紹介を簡単にさせていただきます。「アートサポートふくおか」は民間の非営利団体ですが、法人格を持っていないためNPO法人ではなく、NPOです。

「誰もが芸術文化を身近に楽しめる環境づくり」を活動目的としており、「アートで人とまちをシェアに」をスローガンとし、芸術文化の作り手と受け手、支え手をつなぐ活動をしています。

具体的な活動は大きく2本の柱で構成されており、ひとつは文化施策に関する若干専門的な部分に関わる情報提供をしています。レクチャーの開催や文化施設に関するコンサルティング・調査研究なども含まれます。また今、力を入れてやっているのが、特に子供の芸術体験の機会を拡大しようという活動で、学校や地域にアーティストを派遣し、子供たちにワークショップを行うコーディネートの実施です。その為にアーティストの紹介をするカタログの作成や、芸術と学校を繋ぐお見合いセミナーの開催、またつなぎ手となる人材の養成なども行っています。

現在、県民文化祭として多様なイベントが展開されていますが、その中の芸術体験講座もお手伝いしています。小・中学校から要望を受けさまざまな分野、例として日本舞踊や打楽器、和太鼓、彫刻家など、福岡で活動している多様なジャンルのアーティストが授業をしに学校にいきます。単に演奏を聴いたりお芝居を見てもらうといった形ではなく、子供たちが実際に体験をする、といった事を学校の授業の中でさせてもらっています。また久留米市でも学校への芸術家派遣事業のお手伝いをしています。

このように、子供たちと芸術をつなぐための活動をしています。

先ほどあげたアーティストカタログとお見合いセミナーの開催ですが、カタログは様々なアーティストと子供たちの出会いの場になるように人材の紹介をしているもので、冊子の形式となっており、二年に一回製作し小・中学校や文化施設等に配布しています。またWeb版もあり、私どものホームページからのリンクがあるので是非見てください。

私たちは学校にアーティストを派遣するためのコーディネートという芸術と教育をつなぐ活動に力を入れてやっていますが、教育だけではなく社会の様々なジャンルと文化・芸術をつなぐことが、今、どんどん広がってきています。ただ、こうした活動を広げるにはつなぎ手というものが become 必要になるので、そういった人材を養成していくためのセミナー・講座、またアーティスト側にもこのような活動に関心をもって関わってもらえるような体験セミナーも実施しています。

私たちはこのような形で、さまざまな芸術を中心とした文化の領域で活動しています。

今日は文化ボランティアとして活動をしている方と、文化ボランティアと一緒に仕事をする文化施設・行政の方も大勢いると思います。ここから先は、文化ボランティアの概念や実際にどんな方達が活動しているか、といったことの全体像を紹介します。

まずボランティアというのは、先ほどの館長の話にもでてきましたが、既に日本で定着している言葉になっていると思います。特に仕事を退職後、ボランティア活動に力を入れたいと思う人が非常に多いのはみなさんもお承知の通りだと思います。自身の趣味や経験を生かしながら、また時間がある方はそれを生かしながらやってみたいという人が増えているようです。仲間が作れる、新しいことを勉強できるということに魅力を感じ、ボランティア活動にいそしむ方も非常に増えているようです。ボランティアを「もうひとつの豊かな生き方」と位置づける考え方が今は定着していると思います。そのなかで文化ボランティアについては、言葉が広がる以前から実際の活動が展開されていましたが、「文化ボランティア」という言葉は、平成14年ごろから文化庁長官であった河合隼雄さんの提唱によって一気に広がったように思います。このように活動自体はもっと以前からありましたが、概念として整理されてきたのは最近です。

では文化ボランティアとは何なのかという定義ですが、提唱された河合さんは「文化芸術に自ら親しむとともに、他の人が楽しむのに役立ったり、お手伝いするようなボランティア活動」というように発言されています。これは幅が広いですね。

具体例として、コンサートに例をとると、コンサートを自分で企画し運営するものも含まれるし、あるいは誰かが企画したコンサートの運営のお手伝いも含まれます。コンサートには受付や券もぎり、駐車場整理や会場案内といった周辺活動も必要となりますが、そのお手伝いも文化ボランティアの活動に含まれます。企画運営をするのは非常に専門性の高い活動になりますが、先ほどあげたような気軽に参加できるものも幅広く含んで文化に関わる活動をとらえる言葉になっています。

河合さんの言葉で「芸術文化に親しむ、楽しむ」という言葉がでてきますが、このあたりは他のジャンルのボランティアの方と少しニュアンスが違うところかなと思います。福祉系や環境系のボランティアは、誰かの役に立ちたい、社会の役に立ちたいと気持ちでやる方が多いと聞いていますが、文化ボランティアの方は楽しむという事を大事にしている方が多いように思います。これはとても重要なことで、人を楽しませることにもつながるし、自分達もやって楽しい、これが文化ボランティアの特徴だと思います。

冒頭でも述べましたが、ボランティアに対して関わりをもつ方が増えています。これはいわゆる生涯学習社会になってきた流れと一致しています。もっと勉強したい、自己啓発をしたい、自分の時間を有効に使いたいという気持ちをもった方が増えていることが、ボランティア活動が盛んになっている流れの一つの背景になっています。

個人が文化ボランティアの活動に参加しようと思う背景を述べましたが、次は社会的に文化ボランティアが重要視されるようになってきた流れを掘り下げて話します。

その前提として私なりの整理ですが、地域と文化の関係というものがどういうことかを話します。

みなさん文化に関心があって活動していると思いますが、私も好きだから今の活動に携わっています。しかし、「好きだからやっている」というと個人の趣味の問題だと思われがちで、興味のない人にとっては、文化は自分に関係がない世界と捉えられがちです。でも、今の世の中の流れでは文化には社会的な意義があり、社会とつながっている、個人の趣味の話だけではないよ、というとらえ方が広がっています。

教育・福祉・医療といった文化と違う領域に文化に関わることで、何がしかの力が発揮できる事がわかってきました。例えば先ほど学校にアーティストを派遣し授業をすることを紹介しましたが、何故このようなことをするかというと、今学校は大変なことになっているんですね。例えば幼稚園から小学校へあがるときの小1プロブレム、これは落ち着かない子供が多い為なかなか授業ができるような状態にならない問題ですが、私がいろいろな学校でみると1年生だけではなく、高学年になっても同じような状況になっているクラスもそれほど珍しくありません。また子供達を取り巻く情報化社会の問題もあります。生身の体験・コミュニケーションから疎い状況にあり、バーチャルな世界に入り込んでしまう。ゲームやパソコンが悪いわけではなく、使い方の問題でよくない方へ入り込んでしまい、一対一の人間関係を築く事が苦手な子供が増えています。ひょっとしたら大人もそうかもしれません。

そういう状況にあって芸術家を学校に招くことにどういう意味合いがあるかということ、例えば日本舞踊を教えてもらう、楽器の演奏方法を教えてもらうといったことだけではなく、学校の先生、地域の大人たちとは全然違った価値観、場合によっては変人と呼ばれることもあるような芸術家達の、その道一筋で生きてきた、その生き方そのものを学ぶ場にもなります。こういったことが文化と教育をつなぐ意味合いになっていると思っています。

福祉の分野では、例えば障害のある方が芸術活動に携わることで、障害のない人には出来ないような新しい表現をされる場合があります。そういった表現活動を通じて、ノーマライゼーション、いろんな立場の人が同じ社会の中において当然なんだという考えを広げていくきっかけになります。

また医療の面では、音楽や演劇を使って具体的に治療に役立てるという、芸術療法もすすんできています。

このように私達の生活にとって身近な教育・福祉・医療といった人に関わる部分で文化が力を発揮するということがだんだん知られてきて広がりつつあります。

また、地域の中の共通意識や活性化として文化が活用されることもあります。例えば一つの祭りなどを通じ地域の連携が深まったり、気持ちが引き締まったり、それが愛郷心につながることもあります。その文化イベントや施設が観光資源や雇用となり経済効果につながっていったり、その地域の認知が広がったりといった、その町にとって大きな効果といったことも認められるようになってきています。

人が人らしく生きる力を引き出す。都市を再生して地域に活力を与える。前者はひとつづくりで後者は街づくりと考えています。前者と後者をあわせた、世間でいわれているような広い意味での「まちづくり」はひらがなで「まち」と書くことが多いですが、それと区別するために街づくりと表記しています。「まちづくり」には人が元気になることと、元気になった人が街を元気にすることが含まれていると思います。人が街を元気にし、元気な街には人が集まってくる。このようにひとつづくりと街づくりが螺旋状に絡まり、まちが発展する、これが全体としての地域と文化の大きなイメージです。

ここで求められるのが文化の役割を地域や社会の中に広げていくための人材です。文化には様々な潜在的な力がありますが、その力を地域で生かすためにはどうしてもつなぎ役が必要になってきます。文化ボランティアが社会のなかで非常に注目されているのは、そのつなぎ役としてだと思えます。文化ボランティアは文化の力を地域で生かすために求められている人材ではないでしょうか。例えば図書館には司書、美術館・博物館には学芸員など専門家がいますが、新しく認識されるようになってきた文化の役割は地域の中でその力を生かすことであり、今まで専門家が勉強してきた領域とは違って別な領域の専門性が必要です。文化の専門家がいても地域と文化をつなぐことに十分な力を発揮できるとは限りません。そのために別の形でのつなぎ手が求められています。また、以前と比べると文化施設や文化行政に求められているものは多様化しています。これまでどおりでは対応できない部分があり、しかも社会の流れで予算削減、人員削減となるので専門家ですら配置が難しく、文化行政にいたってはもともと専門家の制度がありません。このようにスタッフが苦労しながら仕事をしているなか、従来からの文化施設の役割に加えて、地域とどうつながるのかが重要になっているのですが、そこを担うのはスタッフだけでは難しいので、文化ボランティアに注目が集まるのです。

では文化ボランティアが具体的などのような活動をするかということに移ります。活動は多岐にわたるので、一つの例として文化施設について話します。

ボランティアの活動の実態把握は難しく、施設や公的な団体が作ったボランティアに登録されていると名簿があったりして把握しやすいのですが、そのような形でない団体もたくさんあります。私たちのような非営利団体にもお手伝いしてくださる方がたくさんいます。私どもはボランティアの制度をもっていないので、イベントごとに人が入れ替わり立ち替わり手伝ってくれています。その方達も立派なボランティアですが、メンバーが固定しておらず名簿もないのでどのような背景の方たちかなど、実態が把握しづらいわけです。

例えば、美術館やホールといった文化施設を中心に考えると、数が多いのが美術館での作品解説やコンサートでの券もぎり、受付、会場案内などの手伝いの方々です。これを第1段階とすると、それより少し進んで第2段階といえるかなと思うのが、文化施設やイベントで運営主体とパートナーシップを組んで活動する、誰かが主体的にやっていることを手伝うのではなく、自身で主体性を持ち、事業の企画運営に関わっていくといった活動ですが、これも文化ボランティアに含まれると思います。これは第1段階のボランティアよ

り数も絞られるし、若干の専門知識や経験、ノウハウが必要になってきます。さらに進んで第3段階は地域文化を創造する自立した市民活動、これは文化施設や運営主体に関わったり手伝うのではなく自分達の自主的な活動として、例えば市民ミュージカルを興したり、映画祭、祭りなどまちづくりと関わるような文化活動を自主的に行っていく、あるいは文化施設と学校や病院とをつなぐといったことを頼まれてではなく自分達でやってしまうという活動です。第2段階からこの第3段階に進むのは少し難しいため、環境整備が必要となります。この第3段階はボランティアからNPOへの流れにもつながっていきます。

ここでボランティアという言葉の概念を整理します。ボランティアに関する研究者が4つに分類しています。

1. 自発性、主体性。

自分の意思で自分から進んで行動する、これがボランティア活動の第一の特徴であり、これこそがボランティアといわれる由縁でもあります。

2. 公共性、連帯性

支えあい学びあいながら社会貢献をする、助け合いつつ自分だけの活動ではなく、社会に対して何がしかの意味ある活動をするという意味です。

3. 無償性、無給性

金銭的報酬が目的ではなく見返りを求めないという意味ですが、ボランティアだからといって絶対に報酬を受け取ってはいけないということではありません。今、ボランティアの活動の中でも交通費の実費支給などや、終日にわたる活動の場合はお昼の弁当、また非常に高度の専門的な活動は業者のように高くはないが若干の報酬をもらうことといったこともあると思います。しかし、金銭的、経済的に何かを得られることを主目的として活動しているわけではなく、金銭的な報酬がなくてもやろうという気持ちで活動している、それがボランティアです。

4. 創造性、開拓性、先駆性

これはとても大切なことだと思っています。理想的な社会や環境を創造していく、そういった活動をするのがボランティアです。先ほどボランティアは自分の趣味、あいている時間、能力を活用している、学びたい方々、自己啓発の熱心な方達が集まっているといいましたが、自分のためだけではなく、社会のことを考える方達です。自分たちにとってあるべき環境、社会はどういうものなのかを自ら考えて、そういう社会を創り出していくために行動する、それがボランティアです。文化ボランティアはそれを文化の領域で実現していくことが基本になると思います。

では具体的に文化ボランティアの姿とはどんなものだろうかという話ですが、ここからは文化庁が平成15年度に行った、文化ボランティア実践者アンケートの結果を使って話します。この調査は、文化ホールと歴史系博物館と美術館、そこで活動している文化ボランティアのみなさんに回答してもらったもので、この範疇に入らないボランティアもたくさんいることをご了承ください。この調査は文化庁のホームページでも公開されています。

文化ボランティアに関係する調査は平成15年、18年、21年と3年ごとに実施されていますが、質問項目も対象も変わっているため経年比較は出来ません。ここでは時間的には少し前ですが、一番ベーシックな内容の平成15年の調査を紹介します。

男女比は男性1、女性2で全体の3分の2が女性です。女性では50歳以上が3分の2、男性は50歳以上が4分の3で、年齢層は高いが退職された人ばかりではないことがわかります。40歳以下の方もたくさんおり、仕事の傍ら文化ボランティアに携わっている方もたくさんいることがわかります。

現在および今後希望する活動については、今やっている活動で一番多いのがキップもぎり、会場整備、誘導補助で46.9%。2番目がガイドボランティア、解説、説明、案内で27.4%。3番目が窓口業務補助の20.7%。これがベスト3です。これが今後希望する活動になると少し様相が違います。1番は切符もぎり、会場整備、誘導補助。2番目のガイドボランティアは今やっている人よりも、今後やってみたい人の割合が多くなっています。3番目は公演、展示、イベント等の企画立案、それから障害者、高齢者の鑑賞活動補助がともに24.0%となっています。単純な活動よりも複雑、高度な活動、もっと先のこともやってみたいという意欲のある方が結構多いようです。

活動の動機については、一番多かったのが、文化・芸術に興味があった、という文化ボランティアならではの結果になっています。自分の空いた時間を生かしたい、勉強をしたいという気持ち以外に、やはり文化や芸術が好きだからという方が一番多いようです。2番目以降は、社会勉強、役に立つことをしたい、時間を有意義に過ごしたい、いろんな人と知り合いになりたいなどがあがっています。

満足していることは？という設問では、動機とつながりますが、芸術文化に触れることができたが80%で、それ以降は多くの人と知り合いになれた、時間を有意義に過ごせたがなっています。逆に不満なことでは文化活動、文化ボランティアについて地域へのPR不足が一番となっています。自分たちがやっていることをもっと知ってほしいという意欲は当然あると思います。2番目は活動に必要な知識習得や、技術向上の機会が少ない。それ以降は、参加できる活動機会がすくない、実費支給が少ない、またはない、情報提供の不足などがあがっています。

活動を継続したいかという質問では、ほとんどの方が今と同程度かそれ以上の活動をしたいと回答しています。また若い人ほど、もっと積極的に活動したい人が多いようです。

文化ボランティアの活動推進に向けて望むことは何かという調査では、文化ボランティアの養成、研修機関の充実、情報提供の充実、ボランティア同士の交流の機会等があがっています。今日のフォーラムは福岡県内でこの様な催しは初めてだと聞きましたが、活動推進にむけて、ボランティアが望んでいる研修の機会、情報提供、交流の場にもこのフォーラムがなっていければいいなと思います。

これが平成15年度の調査から見える文化ボランティアの意識です。ここからは調査結果に公にはでてきていませんが、調査の中に記入された声を文化庁の職員が文化庁月報と

いう冊子に書いているものを拾ってみました。

文化ボランティアが不満に思うことは、職員がやらなくてはならないことをボランティアにやらせる。無料で使える便利屋的な扱いは受けたくない。職員のボランティアに対する認識が低く、無給のパートのように考えている。人手不足解消の手伝いに使われ、ボランティアが持っている能力を生かしきれていない。

このようなことを書いた方が多数いました。本音のことだと思し、気持ちがよくわかります。もっとやりたい、勉強をしたいという高い意欲をもっている方々だからこそ、自分達がやりたいことの環境が整っていないことへの不満が、担当されている職員にむけられているのかなと思います。

一方で職員の声は、人手が足りないからこそ文化ボランティアの力を借りて事業展開を図りたい、ということのようです。文化と地域のかかわりに注目が集まる中、文化施設等の仕事は増大している。そのなかで予算削減、人員削減があり、精一杯だという職員の悲鳴があちこちからでている。であるからこそボランティアの力を借りたい。みなさんの力が大事です。職員がやるべきと思っていられしやるかもしれませんが、そこに皆さんの力を借りたいと思っているのです。これが職員側の本音としてでていました。次にボランティアの意味をもっと考えてほしい。これはどういう意味か、私なりに探って考えてみると、先ほどボランティアの基本概念の中で無償、無給といいました。もちろん無給は絶対的ではありません。金銭的な見返り、雇用関係で繋がっているわけではないので、何か満足感がほしくなりますよね。気持ちはよくわかりますが、そこに走りすぎると若干独りよがりになりすぎてしまうのではないかと思います。自分達はやってあげているという思いが強くなってしまふと一方的になってしまい、やってもらっている側の職員達からは重たいとか、こちらが求めているものと違うといったことがおこってしまいます。活動する側は謙虚に自分達の活動を振り返ってみることも必要なことだと思います。

今、紹介した文化ボランティアの声と職員の声はお互いに出し合えばいいのになと思います。アンケートをみていて、コミュニケーションしていますか？と気になりました。みなさんはいかがでしょう。コミュニケーションは非常に大切なことです。同じ施設や同じイベントに関わる同士、立場は違うが、利用者を楽しんでもらいたい、市民の方にこういうことを提供したいといった思いを持っているのは同じですから、もっとコミュニケーションをはかる必要があるではないでしょうか。

今後の文化ボランティアをもっと広げていくために何が必要かと整理をしてみると、文化ボランティアコーディネーターというものが必要になってくるのではないかと思います。これは新しく私が提唱していることではなく、文化ボランティアの概念が広がり始めた当初からからいられていることです。

文化ボランティアコーディネーターとは、文化ボランティアと受け入れ側の文化施設をつなぐ存在です。ボランティア側と受け入れ側のコミュニケーションの不足が起こらないように、うまく取り持つ役割を担います。これはボランティア側にいるかもしれないし、

受け入れ側にいるかもしれないし、または両方にいるかもしれません。どちら側においてもいいので、ボランティア側が考えていること、受け入れ側が考えていることその両方を理解し、うまく話し合っって両者をつなげることが役割です。

具体的な活動として、文化ボランティアが活動を展開するための環境整備をする役割があると思います。例えばボランティアが活動現場で「たまり場」とよびますが、控え室のようところで情報交換をすることで、次の活動へのアイデアが出てきたり、提案がでてきたりするのではないかと思います。しかし活動している人はいるのに皆さんが控える場所、たまり場になる場所がなかったりすることもあります。その場合に、そういう場所があったらいいと、受け入れ側に伝える役割も必要です。それから情報を共有するという、たまり場と同じような仕組みですが、引継ぎノートを作って、その活動で受けた質問とその回答を書いたり、この情報はここに載っているといたちょっとした事を書いて、他の人に伝えられるようにすると、後の方も助かるし経験を他の人に伝えられたりします。そのような仕組みを作っていくといったアイデアをだします。また、ボランティアの中から自分の能力が生かされていない、自分はまだもっとできるのにいつも頼まれるのはもぎりばかり、もちろんもぎりも必要だけど他にもこんなことができると言っているのに使ってもらえない、といった声を聞くことがあります。そういった個々の能力を発揮できる配置を考えていくことも大事です。それから文化ボランティアが望むことにもあった、地域への発信をコーディネーターが先頭にたってアイデアを集めながら実施していく役割を期待されています。ボランティアの中のリーダーか、受け入れ側の担当者がやることかもしれませんが、ある種の専門家としての文化ボランティアコーディネーターの存在はとても大事なことはないかと思ひます。

もう一つ、先ほどお話しした文化ボランティアの活動の3段階をもう一度見てください。補助的なこと、他の誰かの活動の手伝いから、自分達が自主的にやるどころへ。そして地域文化を構築し、自立した市民活動、NPOの活動に近いような活動をやっていくという流れです。数的にいえば第1段階が多く、大切なところですが。文化施設にとって言えばヘビーユーザーである第1段階の人が増える中で、第2第3段階への活動に繋がるように活動の高度化をすることも大事です。

第3段階の活動までいくと、地域文化と地域をつなぐ「地域文化コーディネーター」とも言えるのではないのでしょうか。この「地域文化コーディネーター」という言葉も最近広がりつつあります。文化ボランティアから、地域文化コーディネーターへ進化することもあるのではないのでしょうか。数はそんなに多くないかもしれませんが、自分達の活動の場を自分達で作っていく所まで高めていくことが出来る人がそのまちにどれだけいるかで、まちの活力がずいぶん変わってくると思ひます。初めのほうでお話しした、人が元気になって街を元気にする。元気な街に元気な人が集まってくる。これが、文化がまちづくりに関わっていく概念だとしたら、それを支えているのが文化ボランティアであり、そこから派生していった地域文化コーディネーターということになるのではないのでしょうか。

今、国でも河合長官が提唱した文化ボランティア推進のために、いろんな施策をだしています。当初から実施されていたのが各地の文化ボランティアの活動を紹介することで、文化庁がインターネットで情報のデータベース化を行っており、様々な事例を見ることができます。それから文化ボランティアコーディネーターの養成にも国がお金をだし支援するとしています。また今日は福岡県版のフォーラムですが、全国版のフォーラムも毎年開催されていて、先月、滋賀県で文化ボランティアフォーラム全国版があり、2月初旬には鹿児島県でも開催される予定です。こういった文化ボランティアの交流の場についても、国が力をいれてやっているところです。さまざまな研修、交流の機会をとらえて、みなさんの活動の裾野が広がり、地域文化コーディネーターに関わる活動にも高まっていくとよいと思います。

今日はこのあと、みなさんから具体的な活動の様子を聞いて、私がお話した文化ボランティアの全体像とつなぎながら、文化ボランティアってなんだろうと考えてもらい、それぞれの活動に役立てていただくとありがたいと思います。